

宮大工の伝統技術が  
保存修理で明らかに

びんごいちのみやきびつ  
**備後一宮吉備津神社**

広島県福山市



広島県福山市の備後一宮吉備津神社の本殿は福山藩初代藩主水野勝成が旧規模に習って慶安元年（1648）に再建したもので、国の重要文化財に指定されています。大規模修理は昭和46年（1971）に屋根の葺替部分修理を行ってから半世紀が経過していたため、令和元年から現状維持の方針で屋根葺替、部分修理、塗装修理が行われ、令和4年4月に本殿に御神体が戻されました。

本殿の構造は桁行7間・梁間4間で、その屈指の規模は備後・安芸地方によくある「余間造り」の平面を持つことを特色とし、正面に角度の深い千鳥破風と規模の大きな軒唐破風を持った江戸時代初期の建築でありながら、優秀な<sup>かえるまた</sup>葺股を備えており、安土桃山の様式も備えています。

何より本殿が単独で建つため、誰もが本殿前でお参りすることができるのが大きな特徴です。これまで解体を伴う大掛かりな修理が行われなかったため、この度、新たに建立以降に行われた屋根形式や内陣木階段の改変、塗装修理などが確認されました。

本殿の建立年代は、慶安元年7月に仮殿遷宮、同15日に旧本殿を解体、8月5日に現本殿が立柱、10月13日に正遷宮が行われたことが知られていましたが、この度の修理で本殿北妻の破風板裏面の拝み部分から「慶安元年／八月二十二日／大坂之（住）人／さい志ん町／ひせん屋／五郎兵へ」の墨書が見つかり、用材の入手と部材加工地が明らかになりました。

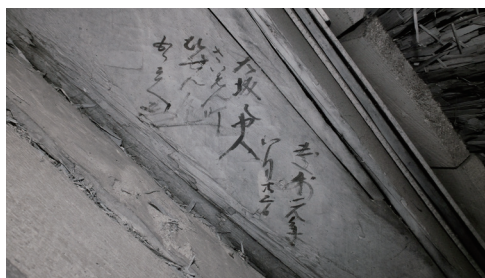
この墨書は、文字の向きから破風板取付後に書かれたと考えられ、墨が鉛丹塗の飛沫の上に重なるため、塗装工事の最中か後に書かれたようです。また、当初の化粧材の多くから金属製の刻印に墨を付けて打刻した「備後一宮御用木」の印が見つかりました。建造物の彩色は、外部全般ほかの既存塗装を剥がし、木地調整のうえに新たに塗装の塗替えが行われたことで、本殿再建時に福山藩の関与が材の調達まで及んだことが考えられます。

今回、屋根以外で破損がみられた範囲は、床下の部材や背面の柱および縁束の足元など限定的で、建物全体としてはしっかりしていました。今後も一宮さんの愛称で地域に大切に護られ、親しまれ続けることでしょう。



備後一宮 吉備津神社

■位置図



北妻破風板裏面の墨書  
(赤外線写真)  
八月二十二日 大坂之中(住)人  
さい志ん町 ひせん屋 五郎兵へ



備後一宮御用木刻印



丹塗・胡粉塗・黄土塗・緑青塗・墨塗・朱漆塗・黒漆塗（金箔押し）など塗り直し行い、銚金具の補習を行った



室町の風格と桃山彫刻を具備した葺股  
(塗り直しが行われた葺股周囲の平彩色・彫刻彩色)